

# 糖尿病性腎症の病理と予後

## ～高血圧性腎硬化症との差異を中心に～

金沢大学附属病院血液浄化療法部 古市 賢吾

金沢大学大学院腎病態統御学・腎臓内科学 和田 隆志

### KEY WORDS

- 糖尿病性腎症
- 高血圧性腎硬化症
- 腎予後

### はじめに

糖尿病性腎疾患は、わが国をはじめ多くの国における末期腎疾患の主要な原疾患である。しかし、腎障害の発症や腎機能障害および蛋白尿の進行パターンは、症例によって大きく異なる。したがって、臨床データおよび病理所見を用いたリスク分類は、治療や予後予測のうえで重要である。腎生検標本を用いた近年の臨床病理学的検討により、糖尿病性腎症の病理学的変化はこれまで知られていた以上に特徴的であり、臨床病期ごとの病理所見が、それぞれ予後予測に重要であることが明らかになった。さらに、糖尿病性腎症と高血圧性腎硬化症の臨床・病理学的所見とを比較すると、微量アルブミン尿および推算糸球体濾過率(eGFR)が保たれている症例群においては、2群間の病理所見にはほとんど差がないことが明らかになった。この知見は、糖尿病性腎症の発症、進展機序を考えるうえ

で重要と思われる。今後、早期の腎病理評価を含めて検討を進めることにより、糖尿病性腎症の病理学的な発症・進展機序が解明されることが期待されている。

### I. 糖尿病性腎症の臨床と病理

糖尿病は、さまざまな臓器合併症を引き起こす。腎臓は、その主要な標的器官の1つである。また、糖尿病による腎障害は、わが国における末期腎疾患の主要原疾患である<sup>1)</sup>。しかし、腎障害の発症時期や、腎機能障害および蛋白尿の進行パターンは、症例によって大きく異なる<sup>2)-4)</sup>。したがって、腎障害の発症および進行のリスク層別化は、临床上非常に重要である。血糖コントロールの程度や、レニン-アンジオテンシン阻害薬の使用の有無、あるいは高齢化の影響など、糖尿病性腎症の臨床経過に影響する因子は多々あ

Prognostic value of pathological findings in diabetic nephropathy.

Kengo Furuichi (部長)  
Takashi Wada (教授)

# SAMPLE